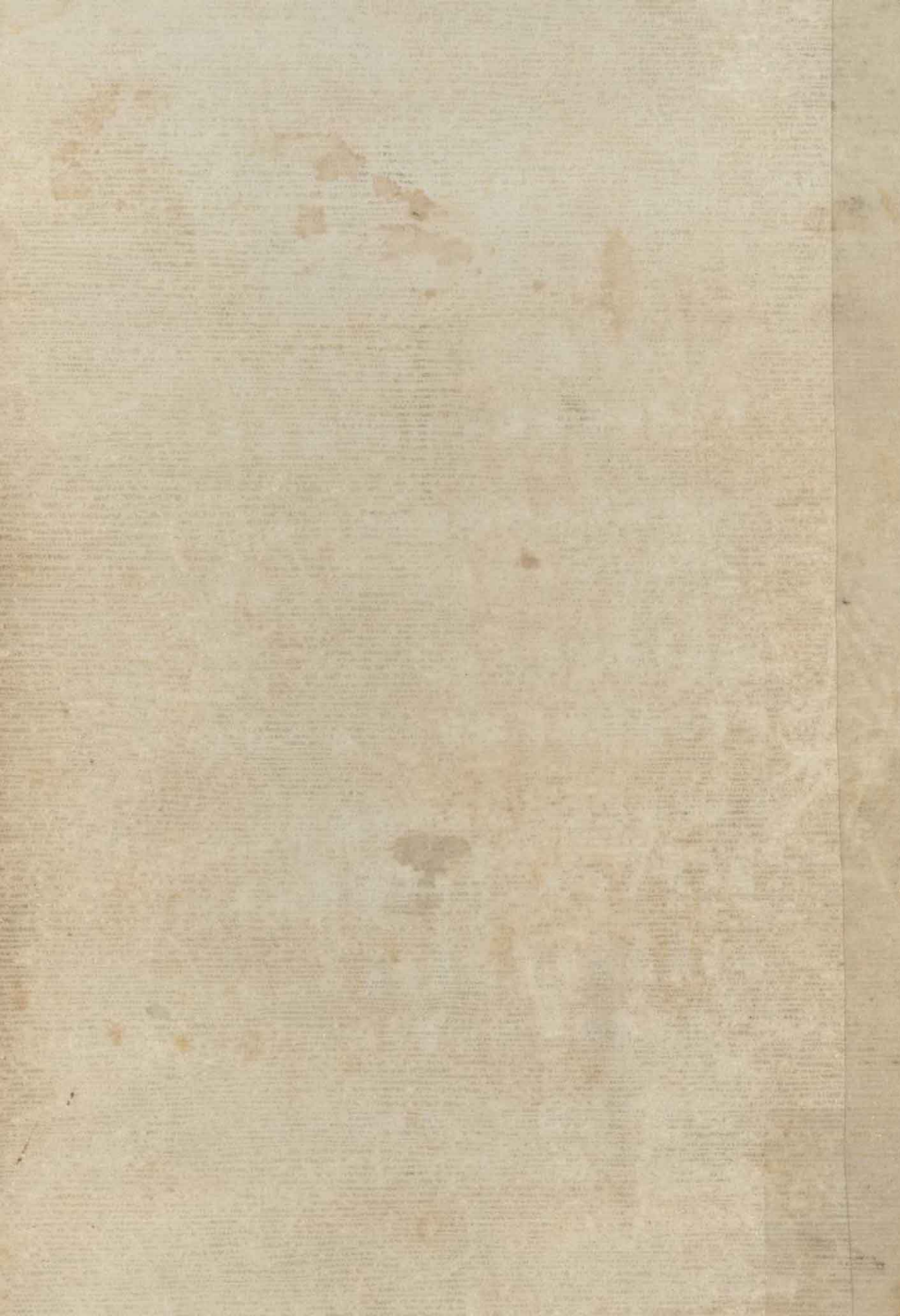




翔る白日

小説大津皇子

石重吾



中央公論社

天翔る白日 小説 大津皇子

定価一三五〇円

©一九八三

昭和五十八年十一月十五日初版印刷
昭和五十八年十一月二十五日初版発行

著 者 黒岩重吾

発行者 高梨 茂

印刷 三晃印刷
製本 大口製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二丁目八十七

振替 東京二一三四

検印廃止

ISBN4-12-001256-5

天翔る白日^{あまかけ}

小説 大津皇子

第一章

西暦六七九年、天武八年五月六日、吉野の空は暗く曇り、今にも雨が降りそうであった。旧暦の五月である。もう梅雨の季節に入ろうとしていた。一昨日も大雨が降ったらしく、吉野川は水嵩を増し、水流は強く激しい音を立てて流れていた。川水は湾曲した懸崖や川岸から突き出た岩床に激突し、水飛沫をあげている。

大津皇子は父天皇（天武）、皇后鸕野讃良、その他の諸皇子と宮滝の離宮の川に面した庭にいた。対岸の山々の緑は濃く、ところどころの山間は、まだ消え去らぬ闇を残しているように暗い。時刻が卯の刻（午前六時およびその前後）を過ぎていくにもかかわらず、山々が闇を残しているのは、雲が厚いせいであらう。

今日の誓のため、庭の南の崖の上に白木の柱が立てられ、樹々にも白い幣が結ばれていた。柱の下には香炉が置かれている。

天皇と並んだ皇后の傍に立っている草壁皇子は、落ち着きのない眼で絶えず空を眺めていた。

雨が降るのではないか、と心配しているらしい。

身長五尺六寸（百七十センチメートル）はある大津皇子と同じぐらい背の高い高市皇子は、天皇と向き合い、話をしている。皇子たちの舎人は一群になって屋形の前に坐り、その前に高位の官人が、数人莫座の上に坐っていた。

天皇は今度の吉野行幸には高位の官人たちしか連れて来なかったのだ。庭の東には諸王が緊張した面持ちで立っていた。

蒸し暑い季節だが、朝の吉野は飛鳥の都よりもはるかに涼しい。

天皇以下官人たちにいたるまで礼装であった。天皇の上衣は最も深い紫色だが、襟と袖は朱色である。

皇子たちも、それぞれの位に応じ、紫色の上衣に褶を袴の上に付けていた。

褶の着用が禁止されたのは、三年後の天武十一年の十一月からで、当時はまだ褶を着ていたのだ。上衣の色も後には変り、紫色は高位の官人たちが着用するようになった。

時に天皇は四十九歳、皇后も三十五歳になっていた。

今度の吉野行幸に天皇に同行を命ぜられた皇子たちは、大津、草壁、高市、河嶋、忍壁、芝基の諸皇子である。ただし、河嶋、芝基の父は天智であって、天武ではない。

天武にはまだ大勢の皇子がいるが、幼いので連れて来なかったのだ。

大津には、父が吉野に十五歳以上の皇子たちを連れて来た意図が大体推測できた。そして昨夜、大津は一人だけ父に呼ばれ、諸王や宮廷の官人たちの動向にまどわされることなく、諸皇子が結

束して、自分と皇后の政治を支えるように、と頼まれたのだった。

父はその際、草壁皇子の名を出さなかったが、大津には父の苦衷が理解できた。

皇后は、父に、自分が産んだ草壁皇子を皇太子にして欲しい、と頼んでいるにちがいなかった。だが草壁皇子は、身体が弱く凡庸な皇子であった。大津と仲のよい河嶋皇子なども、草壁皇子が皇太子になると、せっかく軌道に乗りかけている政治体制が乱れるかもしれない、と大津に洩らしていた。

そういう諸王、官人たちの声を父はよく知っているはずである。だが、あの七年前の壬申年^{じんしん}の戦で、父と苦勞を共にした皇后の氣持を、父は無視できないのだ。皇太子を大津にするか、草壁にするか、で父は悩んでいた。

だが若い大津には、父の氣持が理解できるものの、皇后に氣兼ねし、自分の意志を貫徹しないという父が何となく齒痒^{かみかゆ}かった。

神祇伯代理として出席していた中臣連大嶋^{なかつとみのむらじおおしま}が、高位の官人たちの末席から立ち上がり、皇后

の傍に寄った。中臣連大嶋は皇后のお氣に入りで、何かと草壁皇子の世話をやいている。學識もかなりあり、博學で天皇も大嶋の學識は認めていた。今日の大嶋は神祇伯代理なので白衣姿だった。皇后が領^{うりなす}き天皇に、御用意ができております、と告げた。

幣を結んだ紐が掛けられた白い二本の柱の間には巨大な青い岩があった。天皇と皇后が柱の前に立ち、皇子たちは一列に後ろに並んだ。

先頭は草壁皇子、次は大津、その後ろに高市が立っている。

中臣連大嶋は腰をかがめながら天皇と皇后の傍を通り、幣を青い岩に置き、天神、地祇に祝詞をささげた。六世紀倭国に伝わった仏教の教典に対抗するため、七世紀前半から後半にかけて中臣氏が作り上げた祝詞である。

祝詞を終えると大嶋は天皇たちに叩頭し、自分の席に戻って行った。

天皇が柱の間に立ち手を合わせ頭を下げると、皇后始め皇子たちもいっせいに天皇に習い、頭を下げるのだった。大津も頭を下げたが、他の皇子たちは、今どんな気持だろうか、と醒めた気持であつた。

大津皇子は、このような形式張ったことが大嫌いである。ただ、頭を下げ小鳥の鳴声に耳を澄ませていると、五年前十四歳で伊勢神宮の斎王となつた姉、大伯皇女のことかと思ひ出されるのだ。姉は今年十九歳、普通なら高市皇子あたりの妃になり、すでに一子を産んでいるはずだったが、斎王である姉はまだ男を知らない。大津にはそんな姉が不憫でならなかつた。姉が女性の悦びも知らず一生を終えるのか、と思うと大津の胸は痛むのだった。

河嶋皇子の話では、姉が斎王になつたのは、父の意志よりも皇后の意志のほうが強かつたらしい。もし姉が高市皇子あたりの妃になつたなら、大津には父以外に有力な庇護者ができる。皇后鸕野讃良はそれを恐れたようであつた。草壁立太子のための布石といつてよい。

大伯皇女を斎王にした時、父はそこまで考えていなかつたようだ。あの大戦争に大勝し、倭国の専制王者になつた父には、王者としてなすべきことが山のようにあつた。

皇后はそんな父の虚を突いたというのである。だが大津はこの頃、父には父としての感情があ

ったのではないか、と考えるようになっていた。だから河嶋の意見には全面的に賛成できなかった。

長い間、天神、地祇に祈りを捧げていた父天皇は、やっと皇子たちのほうを向いた。

父は、皇子たちに横に並ぶように命じた。神々に祈りを捧げた後だけに父の顔は厳しかった。傍で皇后鸕野讃良は父とは対照的な穏やかな顔を皇子たちに向けている。

「皇子たち、今日朕がそちたちを集めた理由については、宮を発った時述べておいた、朕はこの庭で、そちたちと共に誓いを立て、千年の後々まで、ことが起こらないようにしたい、と考えている、そちたちはどう思うか」

と父はおごそかな声でいった。

草壁皇子は、すぐ返事をするように、皇后にいわれていたらしく、

「理、ごもつともでございます」

と女性じみた甲高い声で答えた。

父は頷くと、視線を大津皇子に移した。

大津も落ち着いた声で同じ返答をした。こうして皇子たちは順々に、同じ言葉を述べたのである。皇子たちの返答が一巡すると草壁皇子が、一步前に進み出て、一緒にお答えしよう、といった。穏やかな皇后の眼が皇子たちの表情を窺うように一瞬鋭く光った。高市皇子が、草壁皇子の言葉に応ずるように、おう、と力強い声を発した。

草壁皇子は高市皇子の声に力を得たように、理、と甲高い声をあげ、諸皇子も唱和したのであ

った。唱和が終ると草壁皇子は天皇の前に進み出た。皇后が眼を細め、頼もしそうにそんな草壁皇子を眺めた。

「天神、国神、および天皇に申し上げます、我々兄弟、長幼あわせて十王は、それぞれ母を違えています、しかし、同じ母であらうとなかろうと、天皇のお言葉に従って、お互いに助け合い、争いは致しませぬ、もし今より後、この誓いに背くようなことがあれば、生命は滅び、子孫は絶えます、このことを吾は忘れぬ、過ちも犯しますまい」

自分の声に酔い昂奮したのか、草壁皇子の病弱な青白い顔が赤く染っていた。草壁皇子は誓いを終えても、まだぼんやり立っていたが、皇后の、草壁皇子、という言葉に吾に返り、大津皇子の傍に戻った。

大津は父、天皇の前に立った。もし母の大田皇女おほのひめみこが生きていたなら、吉野の盟会で真先に宣誓するのは、草壁皇子ではなく、自分のほうであった。なぜなら、大田皇女は皇后の姉であり、当然、父の後宮の女人の中では筆頭格にあったからだ。

皇后の視線を意識しながら、大津は落ち着いた口調で宣誓した。次に高市皇子がいつもの高市らしく重々しい声で宣誓を終えた。

その後天皇は、自分の子供たちの母親はそれぞれ違っているが、同じ母親から生まれた兄弟のように愛しよう、と告げ、一人一人の皇子を両腕を拡げて抱いた。

大津を抱く父の腕には力が籠っている。不満はあるだろうが辛抱して欲しい、と父はいつているようだった。

父天皇は、六人の皇子を抱いた後、熱を帯びた声で、叫ぶように宣誓した。

「天神、国神、もし朕がこの誓いにたがわば、ただちに朕が身を滅ぼし給え」

壬申年の戦の大勝で専制王者となった父は、現人神と尊ばれるようになっていた。それをいい始めたのは、あの大戦に参加し武勲をあげた者たちであった。父は、そのように自分を崇める官人たちの声があるのを知っていた。時には、神のようにふるまって見せる時がある。

だが、この吉野の盟会で、父は自分が神であることを否定し、弱い人間でしかないのをはっきり宣言したのだ。それだけに、父の必死の気持は、諸皇子、諸王、群臣に伝わった。凄まじい吉野川の水流の音も一瞬消え去ったようであった。宮滝離宮の庭は神秘的な静寂に覆われた。

それを破ったのが皇后の宣誓であった。

皇后は何と天皇と同じようなことを、いかにも真剣な顔で宣誓したのである。

とたんに大津は、緊張感が薄れ、これまでの父の宣誓さえも、茶番劇に思えてきた。そう感じたのは、大津だけではないらしく、気抜きのしたような気配が、並んでいる諸皇子の間に流れたのを大津は感じた。

ただ真面目な武人肌の高市皇子だけが、皇后の宣誓を真剣に聴いているようであった。

だいいち草壁自身、母の宣誓が面映いらしく、身体こそ動かしていかないが、気持が空に飛んでいるのが、隣に立っているだけに、大津にははっきり感じられた。

皇后が草壁を皇太子に即けようと必死になっているのは、諸皇子、諸王を始め、宮廷の官人の殆どが知っていた。いや、皇后の草壁に対する溺愛ぶりは、宮廷の女官たちの間でも評判だった。

大津と嬌合^{まぐは}った宮廷に仕えるある女官は、皇后が草壁に、もっと大きな声で話さなければ威厳がない、衆望が大津皇子に集まっているのが分らないのか、と叱責しているのを耳にした、と大津に告げたことがあった。また河嶋皇子は、皇后が、草壁が作った歌を詠^よみ、こんな味のない歌を諸官の前で詠んだら馬鹿にされる、といって、歌を書いた紙を破ったのを見た女官がいる、と大津に話した。

そんな例は二、三ではすまない。

皇后の脳裡にある皇子といえ、草壁皇子しかないのだ。あの賢明な父に、そのことが分らないのだろうか、と大津は満足そうに皇后の宣誓を聴いている父の顔を眺めた。

皇后の白々しい宣誓さえなかったなら、父が、天神、地祇に誓った言葉の効果は大きいはずだった。あの父が現人神であることを否定し、自分の身を滅ぼしてもよい、とまで口にしたのだ。

これまで、父はこういう公の場所では絶対弱さを見せなかった。それだけに諸皇子は衝撃を受け、父の言葉を脳裡に刻みつけたにちがいない。

だが何もかも皇后の宣誓のため無駄になってしまった。皇后に宣誓を命じたのは、父天皇にちがいがなかった。宣誓させることによって、草壁皇子にだけ向いている皇后の気持を掂^かげよう、という意図もあったのかもしれない。

もしそうなら、父はまちがいに愚鈍なことをしてしまったのだ。

大津は、今日初めて、父の頭脳と精神の衰えを感じた。

六七二年、吉野に籠っていた父は、東国、美濃・尾張の兵を動かし、近江朝を破り大勝した。

それ以来父は、倭国の王者として最大の権力を握るに到った。

そして父は、兄、天智が意図した中央集権制度を徹底させ、律令国家の建設に邁進してきたのだった。父を支えたのは、大友皇子に反撥した王族であり、壬申年の戦に参加した父の忠臣たちであった。だが政治機構が複雑になるにつれ、近江朝の官人だった有力氏族たちも、登用せざるを得なくなった。

当然、両者の間には溝ができ、時には軋轢が起こる時もある。

ことに父は権力を一手に握った勢いに乗り、左、右大臣を置かず、自分の手で政治を行なった。土地国有、百姓の公民化も徹底させようとした。新しい租税制度に備え、地方の国境を定め、国を分割した。近江朝が課した苦役に泣き、反乱軍大海人皇子（天武）に期待した地方豪族たちは、新政権の政治に裏切られることが多かった。彼等は自分たちの権力、実益が新政権によって一層制限され、剝奪されるのを知って愕然としたのだ。

父はそういう地方豪族の不満を抑えるため、臣、連、伴、造、国、造など、特権的身分を持つ地方豪族たちや子弟に官位を与え、また大舍人を作り、そこを出た者を官人組織に組み込んだ。これらの者の中には、新しい時の流れを知り、積極的に新政権に参加する者もいたが、大半は、相変らず旧態依然とした意識から脱し切れないでいた。

だがあの近江朝を破り、新政権を確立した父天皇に実力で反抗する力は、地方豪族や、宮廷官人にはなかった。父はそれをよく知っており、新国家体制の樹立に意欲を燃やす王族、官人たちと共に、様々な矛盾や、不平不満を強大な力によって押えつけてきたのだ。

それは、天武朝における官司の統属関係を見てもよく分る。天武は天智以前の政權の制度を捨て、新しく唐の制度を見習った。

先に述べたが左、右大臣を置かず天皇親政とした。天皇のすぐ下に、おきまつりごとのつかさ太政官、おおもとのつかさ大弁官、かむつかさ神官、みそのうちのつかさ宮内官などを置き、天皇が掌握している。大弁官の管轄内には、のりのつかさ法官、おさむつつかさ理官、おおくら大蔵、つわものつかさ兵政官、かきものつかさ刑官、かきものつかさ民官の六官があり、さらに国司の任命や監督なども行なう。また太政官は、令制の太政大臣とまったく異なり、天皇の秘書官的な存在である。だから、大弁官、太政官の長の官位も高位だが、最高位の者がつくのではなく、しょうきんじょう小錦上（後の直大参）じまだいさん程度の者が任命されていた。まちがいなく天武は、最高位の実力者に政治の中枢部門をまかせたくなかったのだ。

天武の政策は、天皇親政であり、天皇を補佐したのは皇后鸕野讃良であった。

なお、天武は漢風諡号であり、天皇が亡くなった後贈られた和風諡号は、あまのぬな天淳中原瀛真人天皇である。天武が在世中、どう呼ばれていたか、我々は、はっきり知ることができないが、天武十二年までは大海人天皇と呼ばれ、十二年からは『日本書紀』の詔にあるように、やまと倭（日本）根子天皇と自称したのかもしれない。

それはともかく、天皇は掌握した強大な政治権力を十分に回転させ中央集権制度の強化にこれまで邁進してきた。そういう天武の専制的な、また急進的なやり方に反撥した王や官人は多い。『日本書紀』は、氷山の一角しか記載していないが、六七五年、天武四年には、小錦上たぎまのきみひろ当麻公広

麻呂、小錦下阿倍久努臣麻呂の兩名が参朝を禁ぜられ、久努臣麻呂は官位を剝奪されている。

また同年には三位麻統王を因幡に、二人の子は伊豆嶋と血鹿嶋（長崎県五島列島）に流した。翌五年には筑紫大宰三位屋垣王が土佐に、六年には杵田史名倉が伊豆嶋に流されている。屋垣王が土佐に流された事件は、年が六七六年、新羅が朝鮮半島から唐を追いつ出した年であり、彼が筑紫大宰の職にあっただけに我々に重大な事件の存在を感じさせる。

天武朝は、唐との交流を絶ち、新羅と親交を厚くした時代であった。六七〇年から六七六年にかけて、新羅はまだ朝鮮制覇を諦めていない唐軍と戦い、朝鮮統一の悲願を達成するのに必死だった。新羅が最も恐れたのは、倭国を日本国と改めた日本の動向であった。もし唐が日本と手を結び、日本が唐の意に従い新羅に攻撃をかけてくるようなことにでもなれば、新羅は悲願を達成するどころか、その存立さえ危くなる。

新羅は日本を牽制する一方、絶えず使者を送り、貢物を持たせ、日本と親交を結ぼうとした。近江朝を滅ぼし、飛鳥に宮を造った天武がまず直面したのは、唐と手を結び新羅を敵にまわすか、新羅と親交を結び、中立の立場を取るか、ということであった。

戦勝の意気に燃える群臣の中には、この際唐と手を結び、新羅を撃ち、百済を復興すべきだ、というような意見を吐く者もいなかった。それに、倭国は昔から、新羅より百済と仲がよく、大王家の祖先には百済王の血が混じっている。げんに草壁、大津両皇子の祖母遠智娘は、天智に殺された蘇我倉山田石川麻呂の娘であった。

石川麻呂は蘇我氏の有力な支族だが彼には百済王の血が流れていた。

だが天武は唐と手を結ぶよりも、新羅と親交を結び中立の立場を維持する方針を定めた。何と云っても壬申年の戦は、国内に相当な疲弊をもたらした。今は復興と新国家の建設が第一だ、と天武は判断したのだ。と同時に、当時新羅が唐に屈服していたなら、唐軍と協力し倭国を攻める危険性があった。新羅の闘志のおかげで当時の倭国は救われたのである。天武は新羅の勇猛な闘志を評価したのだ。そういうところにも、現実主義者である天武の性格がよく現われている。また唐と手を結んだなら、唐は新羅への派兵を求めるにちがいがなかった。それよりも、唐の脅威を直接受けている新羅と親交を結べば、新羅が唐から摂取した先進文化を存分に享受できるし、律令制度の方法も学ぶことができる。外敵の脅威はまったくくないし、今ほど新国家の建設に全力を投入できる時期はない、と天武は判断したのだ。

それに、新羅はかなり無理をしても、日本の要求を受け入れねばならない立場だった。賢明な天武は、有利な日本の立場を利用した。

新羅と親交を結びながら中立の立場を守る、というのが天武の外交政策だった。

だが、先述したように、古い時代感覚を捨て切れない者は、そんな天武の外交政策に不満だった。

筑紫大宰屋垣王の流刑^{りやうけい}は、日本の新羅政策に不満を抱いた王が、中央の命令に反抗し、独自に軍を動かそうとした結果とも考えられる。実際に軍は動かさなくても、反乱の計画を練ったのであろう。当時の流刑は相当な重罪である。

それはともかく、天武と皇后鸕野うの讃良^{のほむら}は、天皇の命令に従わなかったり、直接的な行動に出よ